

初めての自力下校

広島県立広島中央特別支援学校

小学部第6学年 栗本 将希

初めての自力下校

小学部 6年 栗本 将希

今日は、初めての自力下校の日だ。朝から本当に帰れるか心配だった。

二週間前ぼくは自力下校のテストを受けた。テストの時は、緊張はしていたが、一人でないからどこか安心感があった。テストで合格した時は、うれしいという気持ちと大丈夫かなと思う気持ちが混じり合っていた。そして、二週間ずっと心配だった。

それで、今日から本当に一人での下校が始まるんだ。その日は、校外学習で午前中、先生とバスに乗った。ぼくは、「今日はたまたまバスに2回乗るな。」と思ったぐらいで何も思わなかった。

すごい大きな緊張感が来たのは、教室を出て、玄関でくつをはいて、白杖を持って、先生の「行ってらっしゃい。」の言葉を聞いてからだ。

本当に一人で帰るんだということを実感して、なみだがうかんで、うるうるしてきた。玄関を出て、一人で歩きはじめて、ちょっとの間不安をなくすため、自分で自分に

「大丈夫。大丈夫。大丈夫。大丈夫……。」

とはげました。

ちょうどこの日は、雨が降っていて、バスがおくれていた。バス停で何分か待つが、全然バスが来ない。

「おくれてるんだろうな。」と心の中でおもったその時。

ジャー。気付くとぼくのズボンに水がかかった。車の水しぶきだった。するとまた水しぶきがきた。そして、また水しぶきが来た。何度も何度も水しぶきがかかってくる。

「えー、なんで、こんなに水しぶきがかかるんだ。ついてないなあ。」

と少しイライラした。全然来ないから、家に電話しておかえに来てもらおうかなと思っていたら、ついに待ちに待ったバスが来た。

単眼鏡で行き先を確かめて乗りこんだ。その時は、やっとバスが来てホッと安心した。バスセンターで降りて、次の乗りかえのバス停に向かった。バス停に着くと、何人かの人に

「何か困っていることある？」

と聞かれて

「大丈夫です。ありがとうございます。」

とていねいに答えた。ある人に

「どこに行くの？」

と聞かれたので、

「春日野です。」

と答えると、その人が

「春日野行く人いますか？」

と呼びかけてくれた。そして、乗る人が見つかってその人が春日野行きのバスが来たら教えてくれた。世の中には、助けてくれる人がいるんだなと思って感謝した。世の中には悪い人より優しい人がいるんだと知った。

無事にバスに乗り、座った。もう少しで降りるバス停に着くというとき、中学生くらいの人が一気にたくさん乗ってきた。練習の時も何度かあったが、いつもより人数が多い気がして、ちゃんと降りられるか心配になった。バス停に着くと、

「よけてください。」

と声を出してやっとのことで降りることができた。降りたら

「やっと降りれたー。あとは、家に帰るだけだ。」

と思ったら、そこに妹がいた。妹は、スイミングのバスを待っていた。妹は、

「バイバイ。」

と言った。妹の姿を見て、帰れたことが実感できた。家に着くとドアを開けて

「ただいまー。」

と言った。

「おかえりー。ちゃんと帰れたね。」

と母が迎えてくれた。ぼくは、

「一人で帰れたよ。」

と報告した。うれしくて涙が出てきた。

「すごいね。」

と母がまたほめてくれた。

これからもずっと自力下校は続く。自信はついたかな。ちょっとは。

これから自力下校できる日数を増やして、がんばっていきたい。

<指導者の言葉>

この作品は、自立活動の時間に、「原稿作成を通して自分を見つめ直すことにより、自身の成長を実感できるようにする。」ことを目標に作成しました。

本児童は、一昨年度から自力下校の練習に取り組み、今秋、初めての自力下校をしました。練習を重ねる中で、できることが増えていきつつも、大きな課題も何点かありました。そこで、下校ルートの言語化、地図を使った動きの確認等、実際に歩くだけでなく、歩く練習の前後で十分に予習復習を繰り返すことで、児童の抱える不安や心配を少しでも減らした状態で、自力下校の日を迎えることができるようにしました。

自力下校を終えた児童の振り返りを聞き取りながら、主に次の2点に注意し、まとめるように指導しました。

- ① 各場面、出来事における、自分の心情や、その変化を言語化し明らかにすること。
- ② 実際のやりとりや心の声などを入れ、読者に伝わる表現を工夫すること。

児童は、アドバイスをもとに、「どう思ったか?」「どうしてそう感じたか。」を指導者との会話の中で言語化していくことを通して、改めて自身の心の動きや成長を感じながら作文をまとめることができていました。

この作品は、視覚障害のある児童が感じた、助けてくれる人たちへの感謝や、自身の成長を強く感じるができるものになっています。また、温かい社会があること、努力を重ねること一つずつ成長できることを感じるができる、勇気が湧いてくる作品になっています。